

(様式第 1 号)

■ 会議録 □ 会議要旨

会議の名称	令和 8 年度第 1 回芦屋市放課後子どもプラン運営委員会	
日 時	令和 8 年 7 月 2 8 日（火）午前 1 0 時 0 0 分～1 2 時	
場 所	災害対策本部オペレーションルーム（東館 3 階大会議室）	
出 席 者	委員長 酒井 達哉 副委員長 柳生 加代子 委 員 浅野 晋司 委 員 河合 依三香 委 員 林 真由美 委 員 中村 紀子 委 員 大川 啓子 委 員 大林 亮	
事 務 局	教育部長 萩原 裕子 学校教育改革推進室長 山川 範 社会教育推進課長 渡邊 一義 社会教育推進課 海士部 香苗 社会教育推進課 川原 智夏 青少年育成課長 富田 泰起 青少年育成課青少年育成係長 芝田 勇生 青少年育成課放課後事業担当主査 常塚 貴紀 青少年育成課放課後事業担当主査 池田 聡子	
会議の公開	■ 公開 ----- □ 非公開 □ 一部公開 〔芦屋市情報公開条例第19条の規定により非公開・一部公開は出席者の 3 分の 2 以上の賛成が必要〕 ＜非公開・一部公開とした場合の理由＞	
傍 聴 者 数	0 人	

1 会議次第

- (1) 開会
- (2) 委嘱状交付
- (3) 委員の紹介
- (4) 委員長、副委員長の選出
- (5) 議題
 - ア 令和 7 年度放課後プラン事業利用状況及び令和 8 年度の取り組みについて
 - イ 放課後の過ごし方についてのアンケート調査の報告について
 - ウ 中学校部活動の地域展開について
 - エ 教育課程柔軟化サキドリ研究校事業の説明について

2 提出資料

- (1) 令和 8 年度第 1 回芦屋市放課後子どもプラン運営委員会 次第
- (2) 【資料 1】校庭開放事業について

- (3)【資料2】あしやキッズスクエアについて
- (4)【資料3】令和8年度の取り組みについて
- (5)【資料4】放課後の過ごし方についてのアンケート調査の報告について
- (6)【資料5】中学校部活動の地域展開について
- (7)【資料6】教育課程柔軟化サキドリ研究校資料

3 委員長・副委員長の選出

芦屋市放課後プラン(子ども教室型放課後対策)事業実施要綱第10条第2項に基づく互選により、酒井委員を委員長に、柳生委員を副委員長に選出。

4 議事内容

<酒井委員長>

それでは、議事に入ります。令和7年度放課後プラン事業利用状況等について、まず、校庭開放事業概要及び実施状況について、社会教育推進課より説明をお願いします。

<社会教育推進課 渡邊課長>

～ 説明 ～

<酒井委員長>

質疑につきましては後ほどまとめてということでしたので、続きましてあしやキッズスクエア事業概要及び実施状況について、青少年育成課よりお願いします。

<青少年育成課 常塚主査>

～ 説明 ～

<酒井委員長>

ありがとうございました。

それでは、ここまで何かご質問等ございませんか。

それでは、口火を切る意味で、資料2の2ページ目で、先ほど山手小学校の登録率が伸びているとの説明がありましたが、何らかの要因があるのでしょうか。

<常塚主査>

そもそもの登録率の傾向として全小学校共通で言えるのですが、だいたい1年生から3年生が5割くらいで、4年生が少し減って3割くらい、5、6年生は1割前後となっています。山手小学校は1年生から3年生の登録率が7割くらいあり、4年生も6割くらいあるので、ずっと来てくれている児童がそのまま引き続き参加してくれているというところがあるのかと思います。

<酒井委員長>

よくわかりました。ありがとうございました。他にご質問ありますでしょうか。ご意見等でも結構です。

それでは無いようですので、議題2にも関連してくると思いますので、またその時にもお出しください。

それでは次の議題に移らせていただきます。

「放課後の過ごし方についてのアンケート調査の報告」事務局から説明をお願いします。

< 青少年育成課 富田課長 >

～ 説明 ～

< 酒井委員長 >

ありがとうございました。本当にこれは、「多分こうだろうな」とか「おそらくこうだろうな」といった議論を、より明確にデータで示していただいて、大変素晴らしいまとめだと思います。

また、こういうアンケートをとることによって、新たにわかった部分もありますので、そういうことも含めまして、議題1でご発言がなかった方も次からでも構いませんので、このアンケートを通してご意見またはご質問をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

柳生委員どうぞ。

< 柳生委員 >

とても興味深くこの結果を拝見いたしました。概ね2割の回答なのであとの8割方の声はわからないところでもあるのですが。私は浜風のキッズスクエアに行っておりまして、浜風の場合は、本当に児童の総数が少ない学校なので、登録数などを考えても、アンケートの中で「友達と一緒に参加したい」というのが多く挙げられていたと思うのですが、1年生の参加が、ほとんどが放課後児童クラブに行っているというのもあるんですが、1年生は特に4月から入れないということも大きく反映していると思います。

本当に、1年生が1人だけみたいな日が結構あるんですね。そうすると、一緒に遊ぶ友達がいない。大きい学年の子が探したりして一緒に遊んだりするにしても、やはり「友達と一緒に遊びたい」という理由が影響しているのも表れていると思います。特に浜風は児童の総数が少ないですからそういう傾向が出てしまうので、今後そういった子どもたちがどうなっていくのかを見たいところではあります。

一方で想定されていたことかどうかわからないのですが、利用理由の中には表れていないのですが、浜風の場合は明らかに「保護者の就労のため」に来ている子どもたちが数名います。夏休みですと朝の8時半からお弁当持ちで17時までずっと来ている子もいます。

キッズスクエアの方でも、子どもが友達と一緒にやってきて「ここは高いって聞いている」と言うんですね。そして3年生ぐらいの子が「全然、ここは安いし、いいよ。申し込むのも簡単だしね」と答えていたりします。だから、保護者にとっても非常に利用しやすい状況です。無料ですから。ただし、放課後児童クラブと違っておやつがないんですね。やはり小さい子どもにとって、8時半から来ている子がいたりもするくらいで、お弁当の時間が待ちきれないんですね。「もう食べていい？」みたいに、11時過ぎぐらいから言い出すので「もうちょっと待ってくださいね」と。それで夕方5時まで過ごすわけですから、おやつがないっていうのは、子どもたちにとってどうなのかなと。本当にそういう、放課後児童クラブの代わりとして利用しているケースが多いというのは想定内だったのかどうか、そのあたりもアンケートを見ながら気になりました。

< 青少年育成課 富田課長 >

ありがとうございます。放課後児童クラブは就労されているご家庭の「就労支援」であるのに対し、キッズスクエアは子どもたちの「放課後の居場所づくり・見守り事業」ということで、異なる目的で始めたものなのですが、委員がおっしゃるとおり、保護者の考え方や働き方もあると思うのですが、保護者が働いていてキッズスクエアに子どもが来ているケースで、スタッフからお伺いした話だと、こちらとしては「子どもたちが来たいときに来て、遊んで、帰りたいときに帰る」と思っていたんですけども、子どもが「今日は5時まで帰ったらあかんって言われている」と言って、スタッフから「それはどうなのか」と言われることもあり、こちらも事情は分かるのですが、「キッズスクエアは居場所づくり事業である」という根本は崩さずにいきたいということと、もう一

つは、保護者の考え方や働き方が変わってきている中で、行政の事業として、そこにどう合わせて変えていくのかを考えなければならないのですが、非常に難しく、今、悩んでいるところで、どういった形でキッズスクエアの良さを残していくのか、活かしていくのかというのは、大きな課題だと考えております。

<酒井委員長>

はい、林委員よりお願いいたします。

<林委員>

私は、キッズスクエアのスタッフをしています。アンケートの中にもありましたが、「宿題やお勉強も見てほしい」という声は最近増えています。夏休みも多いですし、平日も宿題をする子は結構、半分以上いて、やはり低学年の子はついて見てほしいというか、そういうことなのかなと実際に感じています。ただ、一番大変なのは塾の宿題を持って来ることです。

ただ、そうなってくると大変で、精道は大学生の若いスタッフがちょっと頑張ってくれているんですけど、私たちのような年代になると、教えるのはちょっとしんどくなってくるんですよね。ですけど、保護者の方は「教えてもらえる」と思って宿題を持たせるのか、子どもに「やっておいてね」と言って塾の宿題なども持たせるんですね。

今後、本来私たちが最初にスタッフとして入るときは「見守ってください」というだけの感覚で入っているの、アンケートで要求されている内容と少しずれてきているのかな、というのは今感じています。

<青少年育成課 富田課長>

おっしゃるとおり、キッズスクエアでは、基本的には宿題を見たり教えたりはしないことになっています。あくまで、子どもさんがご家庭で保護者と「宿題をしてから遊ぶ」などのルールを決めて、自分で判断してというのがキッズスクエアの考え方になります。

そこは教育委員会からの案内には書いているのですが、発信が足りていないところもあるかと思しますので、改めて機会を捉えて保護者の方に発信をしたいと思えます。

夏休みなど放課後の時間が長くなってきていて、学校以外の時間が増えてくると、保護者のニーズとして「宿題も見てほしい」という声が増えてきているみたいです。

ただ、それを全てキッズスクエアで引き受けるとするのは、また別で考えなければならない話かなと思っておりますので、それに対応するとなると、別の手立て、例えば学習ボランティアなど、そういう枠組みで考えないといけないかなと思います。

あくまでも子どもたちが自分で考えて、自分で決めてやるというのがキッズスクエアの大事なところだと思っております。

<酒井委員長>

そういうことが実際にあるということがよくわかりました。実情を教えていただきありがとうございます。ありがとうございました。

河合委員、お願いします。

<河合委員>

私は自治会をやっているのですが、長期休みに、宿題を見てほしいとか、宿題イベントをやってほしいというのがよくあります。小学校の宿題ってどのくらいあるんでしょうか。

<酒井委員長>

浅野委員どうでしょうか。

<浅野委員>

過去に比べるとかなり減っているんです。学年によるのですが、昔のように抱えて帰ってというのは、今は少ないですね。

<酒井委員長>

その上で河合委員。

<河合委員>

なぜ家で見られないのかなというのが1つと、あとは学校任せとか。子どもたちは仲の良い子同士で、算数はこの子に、社会はこの子に、国語は私にとか、社会に関してAちゃんに聞けばいいから、私はしなくていい、学校で見せてね、みたいな話を聞くのですが、そういう場合は家では無理でキッズスクエアに行かないとだめかなとか。子どもの友達が毎日来て断りにくいという相談もあるのですが、キッズスクエアに行ってもあそこでは出来ないからとか。呉川町の福祉センターのフリースペースで、連絡ツールで待ち合わせして、そこで勉強し合っている子どもたちもいます。だから、キッズスクエアの使い方からすると間違っているというか。入学前には説明されていると言われていましたが、転校されてきた方には、学校にこういう場所があるからと教えてあげる機会が必要だと思います。学校に聞けば教えてくれることとはいえ、先生には聞きにくいこともありますし、市役所では教えてくれなかったとかがありますので、転入の際の情報セットには入っていないので、見て初めて知るケースもあります。4月、5月、1回やったら終わりではなくて、途中で、夏休みの前などに周知されたら、午前中だけでも行くような使い方も出来るかもしれないので、周知する場があれば利用率も上がるのではないかと思います。

<酒井委員長>

ありがとうございました。実情を教えてくださいました。この件、どうですか。

<青少年育成課 富田課長>

そうですね。本当に保護者のニーズはいろいろ複雑になってきていまして、それに対してどう対応していくか。当然キッズスクエアだけで解決するというものではありませんので、市がやっている様々な事業の中でどう応えていくか、枠組みを考えていかないといけないと思います。

引き続き、転入された方等への周知というのも少し工夫したいです。学校でチラシを渡してもらっていますが、さらにどう周知できるか、工夫できないか考えてみたいと思います。

<酒井委員長>

よろしくお願いします。他にいかがでしょうか。

中村委員。

<中村委員>

愛護委員の見守りの観点で考えると、これを見ていると4年生になると、いろいろなことが楽しくなるとか、そういうことが増えていくので、やはり3年生から4年生に上がるぐらいのこの学年がすごく大事なんだなとこのグラフからも思いました。中学年くらいから友達との関わりや時間の使い方がそれぞれ変わってくることがすごくよくわかります。とても良いアンケートだと思います。

< 青少年育成課 富田課長 >

3年生ぐらいから高学年は習い事が増えてくるというのがありますし、あと、アンケート結果にはないのですが、保護者の方からお伺いした話で、「学校で出来ないことをしたい」というのがあるそうです。例えばシールの交換やゲームなど、キッズスクエアでは禁止されているけれど、公園だったらできるということで、学校外で遊ぶ子どもが増えてくるという話を聞いたことがあります。そういった高学年の居場所をどうするかというの、いろいろ考えていきたいところです。

< 酒井委員長 >

他にいかがでしょうか。

大川委員。

< 大川委員 >

子どもが放課後児童クラブを4年生でやめたいというので理由を聞いたら「同級生の友達がいらない」「自由で好きなことをしたい」「やりたくないことをやらされる」という意見を聞きました。残念ながらやめる決断をして、しばらくしてキッズスクエアが出来たのですが、やはりその時、地域の方がただ見てくれるだけという風に感じたので申し込みはしませんでした。話を聞いているととても良い制度なのだということは思いましたが、その時は責任は誰も取ってくれないのね、見てだけなのね、と思い、それなら他の見てもらえるところに行った方がいいかなと思いそちらへ行くことになりました。私の時代では始まった時なので違うのかと思いますが、何か誤解されている方も多いようですし、高学年になれば本当に友達が誰も来ないしやりたいことが出来ない、というのが一番の理由かなと思います。こういったところを何か出来たらいいのかなと思います。宿題も、両親とも働いている家庭が多いです。自治会や子ども会などで、役員をやってくれる方もおられません。仕事を持たれている方が多くて忙しくて見られないので、そういうところでやってもらえたら、土日は家で見るのでということもあるのかなと思います。

< 青少年育成課 富田課長 >

キッズスクエアの「居場所づくり」ということですが、これが事業として非常に大事なところかなと思っておりまして。子どもたちが「放課後をどう過ごすか」を自分たちで考えて自主的に活動する。そして、スタッフはそれを見守りながら、適宜声をかける、その声かけを地域の方々にやっていただくというのが、キッズスクエア事業の魅力的な、重要なところだと思っております。

そこが放課後児童クラブとはまた違う形なのですが、子どもたちが自分たちで考える中で、時にはトラブルがあったりもするんですけれども、そこにスタッフが関わっていく中で子どもたちが成長していく。そういう見守りの活動としては、非常に良い形でこれまで実施させてもらっていると考えております。

< 酒井委員長 >

最近、新聞等でも子どもの居場所づくりが話題になっていますが、特に夏休みなどは様々なニーズがあることを含めて、キッズスクエア以外、教育委員会としても現代のニーズや保護者の考えを汲み取っていく必要があると思いますのでよろしくお願いします。

浅野委員どうぞ。

< 浅野委員 >

私は学校現場、行政の経験も多少ありますので申し上げますと、子どもの発達段階に必要なことと、保護者の助けてほしいということは必ずしも一致しません。子どもたちの発達段階に必要な、例えば低学年については、保護者の監護の中で安全安心に遊ぶ機会というのが子どもたちの発達

段階で必要なことです。4年生の場合、友達関係があって、だんだん参加が変わってくる、これは発達から言えばごく当たり前のことで、今まで見えなかったものが見えてきますし、意識しなかった言葉が自分の中で聞こえてきて、あんなこと言われたくないとか、意識が変わってくるから気になって友達との関係も変わってきます。その中で、ひとり一人がやがて世の中に出た時に、自分で自分をコントロールする力をつける練習が始まります。そのため、低学年、中学年くらいは安心、安全な居場所で、一人になる子がいないように、少し大人の目がある中で友だちづくりをする、何をやっていいのかわからない子には手助けをするということが必要になってくるのではないかと思います。高学年になってくると、いよいよ自分で考え行動するというスタンスになってくるので、今日の話や、実際を見ていると、やはり塾の真似事みたいなところになってくると、少し意味合いが異なってくるのではないかな、と思ってしまいます。これから地域クラブも始まるとなると、ますます、自分で自分のことを考えて、自分の生活時間をどうやって組み立てていくのかという力をつけることが必要になりますし、求められていくと思います。別の言い方をすると、今は自主性や主体性がとても求められる趨勢の中で、保護者が求めるのはわかるのですが、子どもに必要なのは何かということちゃんと真ん中に置いた上で、必要な行政サービスは何かと考えていかなければならないと私は思います。

これは学校現場で実際に起きることとして、例えば喧嘩をしましたとか、トラブルが起きたときに、大人がいなければ解決できないような状態を作ることが果たして本当に望ましいのか、自分たちのことは自分たちの力で解決する力をつけていかなければいけない、しかし、そのことまでに至っていない子どもにはしっかりと保護者、あるいは大人がサポートする必要がある、だんだんと手を放してあげるとするのが本来のあるべき姿だと思いますので、それをどういう風に提供していくかということを考えていく必要があります。ただし、そもそも教育基本法の第10条に「教育の第一義は家庭である」と書いてあることを、ご家庭でもまず意識していただかないと、家庭に本来の教育の基礎があるのだと、そこをお伝えした上で、生活の多様化だとか、価値観の多様化を踏まえた対応になるのかなと思います。

ただ、本当にキッズスクエアに関わってくださっている方は、献身的に取り組んでいただいております、本当に子どもたちへの愛を感じております。また、地域の方々が支えてくださることにより、子どもたちは安心安全に暮らしていますので、それは大事にしたいと思いますし、子どもたちにとって必要なことであるということを忘れてはいけないと思います。

<酒井委員長>

貴重なご意見ありがとうございます。事務局からはよろしいですか。

<青少年育成課 富田課長>

キッズスクエアのスタッフからも、保護者の声と子どもの声の両方をよくお聞きします。スタッフの方々もそこはとてもよくお考えいただいているようなので、今いただいたご意見も参考にしながら、教育委員会や学校とも連携して、子どもたちの発達というところにもしっかりと軸足を置いて事業を進めていきたいと考えております。学校教育と社会教育の連携の上で進めてまいります。

<酒井委員長>

学校教育は社会教育との連携が大事だと思われましたので、是非よろしく申し上げます。それではよろしいでしょうか。では、議題3の中学校部活動の地域展開について、ご説明よろしく願いいたします。

<学校支援課 宮本課長>

～ 説明 ～

<酒井委員長>

それでは今のご説明について、ご質問、ご意見があればお願いいたします。
河合委員お願いします。

<河合委員>

中学校の部活に入部する前は授業の一環のように体験入部や見学のようなことがあったと思うのですが、地域クラブではされるのですか。

(4)のWEB広告ですが、ターゲットをなぜ45歳で切っているのですか。

<学校支援課 宮本課長>

はい。あし☆スタでは、実際の活動が始まっているところについては、各部ごとでも行っています。ちょうど2日前の日曜日に潮見中学校で、体験会の参加を希望するクラブによる合同体験会を開いたところです。

また同じように、今後、精道中学校、山手中学校でも合同体験会を随時行っていく予定ですし、各クラブで運動系は8月から開始されますので、開始されればそこからは活動日がおそらく随時、体験会として参加可能な形になっていくかと思います。

Web広告の打ち方につきましては、広告会社のターゲット年齢の切り方によってもっと広くすることもできるのですが、広告代の予算が限られているため、広くしてしまうと効果が薄まってしまいうという事情があります。本当でしたら我々も30代から50代ぐらいまで幅広く周知したかったのですが、予算の関係もあり、ターゲットを集中させたという経緯があります。

<酒井委員長>

他にご質問ございませんか。

今回、2月にご報告いただいた時に予想されていたと思うのですが、中学1年生の部活動入部率とあし☆スタの参加人数については、やはり予想通りでしたか、それとも予想と違った部分はありましたでしょうか。

<学校支援課 宮本課長>

そうですね。現在の部活動の1年生の入部率については、昨年度が8割ぐらいだったのが、今年度は6割ということです。ちょうど今、8月から運動系の地域クラブが実際に活動を始め、11月から文化系が始まるので、それらを考慮して「地域クラブの方に入るか」「先に部活動に入ってすぐ終わってしまうのか」と悩んで、入部率のパーセンテージは若干落ちるかなと思っていましたので、そこは予想通りかなと思っています。

ただ、学校の方で部活動に対して、1年生への特別な周知等を行っているわけではありませんが、選択肢の幅が広がった中で、生徒たちが「どうしようか」と考えた結果なのかなと思っています。

<酒井委員長>

ありがとうございます。よくわかりました。

<学校教育改革推進室 山川室長>

前回、多分私がそういうような見通しについて発言させていただきました。今回「6割」とご報告させていただいたものは、今、申し上げたように「夏秋以降の地域クラブに入るのなら、部活動には入らず控えておこうか」という方がいらっしゃったりとか、色々な動きがある中での例年に比べたら少ない数字です。

我々としては、実際に夏秋以降の地域クラブの加入率が最終的にいくらの数字になるのかというところについては、まだもう少し様子を見させていただく必要があると思っています。そういった数字については、また次回以降、次々回になるかわかりませんが、こういう場でご報告させていただきますが、まだもう少し様子を見る必要があると思っています。この「6割」という数字が目安になるのか、もう少し少ない数字になるのかではないかというところで考えています。

<酒井委員長>

よくわかりました。ありがとうございます。

それでは他にないようですので、議題4、教育課程柔軟化サキドリ研究校事業の説明について、お願いします。

<学校教育課 大林課長>

～ 説明 ～

<酒井委員長>

ありがとうございました。実際はサキドリ研究ということで先進的に取り組まれているとのことですが、今後、芦屋市全体でこのようになっていくだろうということでしょうか。それともなるということですか。

<学校教育課 大林課長>

私からは申し上げられないのですが、学校が選択してやっていくものになるので、40分授業をやっていくとか、時程に関しても学校が決めていくことになります。

ただ、学校だけでは決められない状況もあります。放課後児童クラブを延長するとなるとそれだけの予算の問題が出てきます。その辺りの制度設計を早いうちに作り学校に示すことをやっていきたいと考えています。

<酒井委員長>

まさに裁量時間ということですね。それを、教育委員会や色々なところと連携しながら市として進めていくということですね。

ということは、この委員会では「こういう情報だけを先にいただいた」ということで止めておいでいいのか、それともこの時点で「いや、ちょっと考え直してください」と意見を言うべきなのか、このあたりはどうなんでしょうか。

<社会教育推進課 渡邊課長>

まだ決定ではないので、今のところは、「こういうふうに学校の授業の仕組みが変わっていく」という、情報提供に止めておきたいと考えております。

<酒井委員長>

わかりました。ということで、これが「サキドリ」の最新の情報であり、これからこのように芦屋の教育が変わっていくということで、我々の委員会としてもそれを踏まえて、協議していく必要があるのかなと思います。

この件に関して何かご質問ありますか。特に放課後の時間が伸びるということに関していかがですか。

柳生委員どうぞ。

<柳生委員>

この件に関して、放課後の時間を見るということに関して質問したいと思うのですが。45分授業を40分にするという事で、生み出された時間は教職員の研修にあてられるとのことですが、その間早く帰る子どもたちの動きはどうか、ただ早く家に帰すのか、何か子どもたちへの手当ては考えられているのでしょうか。

また、「サキドリ」の検討ということなのですが、その検討はどこでいつされているのでしょうか。「サキドリ」が決定のような感じになっているのか、やはりやってみて検討はなされるのでしょうか。

私が現役の頃に、宮川小学校の校舎でオープンスペースが出来た時、そのことについての検討をやるべきだったと私はずっと思っているのですが、検討されたかわからないうちに山手小学校も岩園小学校も、岩園小学校は少し違うかもしれませんが、精道小学校もそうになって、それが子どもたちにとって本当にどうなのか疑問に残っているのです。「サキドリ」をしたことで検討はやはり必要だと思うので、今後どうなっていくのでしょうか。

<学校教育課 大林課長>

サキドリ研究校は岩園小学校も含めて全国で300数十校あります。5分間を減らして40分で授業を設計するという事に関して、授業をセットし直すということは考えています。それも含めて、40分、40分を合わせて80分にするとか、いろいろな授業のあり方を工夫しているところです。浅野委員も言われましたが、子どもがどう自分で学んでいくか、「学び方を学ぶ」といったことに、芦屋市だけでなく日本全国が悩んでいるということがあり、学習活動、学び方をどのように授業に入れていくかなので、5分を減らして、どのような形で知識や思考をその授業の中に入れていくか、授業のセットそのものを考えていく必要があります。

早く帰る時の「手当て」という話ですが、現在、岩園小学校では早く帰っています。そこで福祉的な、社会的な観点から言うと放課後児童クラブやキッズスクエアにお世話になっているのですが、その一方で、そこに入っていない子どもたちもいて、帰って公園に行っているか、一人で過ごしたりする子もいると思いますし家庭に任せています。そこでも先ほどから話が出ていますが「子どもが自分で自分の生活をどう設計していくか」ということをどう学んでいくかを学校教育に入れなければならない、学習の中で自分で自分の力を高めるためにどのように自分で授業を受けていくか、授業を作っていくかといったところを、今、学校で知識を伝えるだけでなく、どう構成していくかということに取り組んでいるということです。なので、ご質問の「何か手立てを」ということには、今のところ特に考えてはおりません。

また、「サキドリ」の検討については、サキドリ研究校の指定が文部科学省からあり、検討会は年3回あります。オンラインですが、その中で色々な情報交換をしまして、失敗例や成功例を随時共有する仕組みがあります。文部科学省でも、これまでは研究発表というと全部「成功しました」という形になりがちでしたが、それを「これは止めておきましょう」とかいうものも集約する形にしていますので、動き出しながら一緒に課題の検討もしていくということで、岩園小学校だけでなく全国の研究校で知恵を出し合っている状況です。様々な課題はこれからも出てくると思いますので、それを岩園小学校でカスタマイズしていくということで、知見を他校にも共有していきます。

<酒井委員長>

よろしいでしょうか。他どうでしょうか。

林委員どうぞ。

<林委員>

どうして午前中を5時間にしたのか、気になったのが、給食の時間を挟むことで前後するところを、4時間に早く食べさせてあげて、という考えにできなかったのか。今、朝食を食べずに来る子どもやたくさん食べられない子どもが増えてきているので、この15分が子どもにとってどうかと思っていたところです。なぜ5時間を前にしたのかなど。

<学校教育課 大林課長>

正解が何かというのはわからないのですが、5時間にしたのはモデルがあり、兵庫県の中でも5時間に、午後にゆとりをもたせる時程を組んだという取組があります。

給食については、12時ごろに食べられたらいいという考えがあるかもしれないのですが、給食には給食を作る時間があり、あまり早くできないという事情はあります。なので、給食の時間は、本当にそれぞれの学校の判断になると思いますが、芦屋市は本当に家庭の協力が得られていて、毎年、文部科学省が調査している朝食の摂取率も比較的高いのでありがたいと思っているのですが、いろいろな方法があるということです。

放課後の時間というのは、本当に先生たちにとっては次の授業の準備だったり、子どものことを考えたり、保護者へ連絡したりと、とても色々なことが詰まっている時間なんです。そこを余白という言い方になるのですが、教員の余白をどう確保するかということが重要になってきます。

ただぐっと詰め込みすぎて、やはり休み時間はこちらの方がいいじゃないかというのも岩園小学校から出てきていて、1年の間で時程を変えるということはなかなかしないのですが、岩園小学校ではそういうこともできたので、休み時間を取って子どもの関係づくりをちゃんとやってということで、2学期から時程を変えるそうです。やって検討を重ねている、今までのようなPDCAが間に合わないのもそれよりも凝縮してやっている、やりながら検証しているところです。

<学校教育改革推進室 山川室長>

補足ですが、岩園小学校で「サキドリ」をする際に保護者の皆様に配布した学校からのお知らせがあり、「サキドリ」に関するQ&Aがありまして、その中でご紹介させていただきたいのですが、「授業時間が少なくなっているのではないですか？」という問いに対して「子どもの学習時間が減っているように見えますが、現行では、給食終了日や個人懇談会、大きな研修や会議がある時は、これまで5、6時間目をカットしていました。午前中に5時間目まで実施することで、裁量の時間を教職員の資質向上に費やしても、大幅に児童が学習する時間が減ることはありません。むしろ低学年は学習時間が増えています」というような回答をさせていただいております。つまりこれまで午前中で終わって午後から懇談をする時などは、この時程で5時間目までやった上で給食を食べて帰る、という流れになりますので、学校側の事情も入れているということです。

<柳生委員>

もうひとつだけ、20数年前に「総合的な学習の時間」が導入された時、教科書とかもなく、手探りでやってきた経験があり、本当に大変でした。そのコーディネートしていく、総合的な学習の時間を作るのは本当に大変だったということがあって、子どもたちと一緒に取り組む中で地域の人とつながって、そういう体験は、私にとっては本当に大変でしたが記憶に残る授業ができた学年もあって、今回出てきた「総合」はそういうところとつながっているのでしょうか。

<学校教育課 大林課長>

かつての「総合的な学習の時間」が導入された時の考え方と同じだと思っています。この資料の中の時程で火曜日と水曜日、「対話タイム」と「探究タイム」、これも「総合的な学習」が始まった時にここを統合させて40分と25分で65分を1コマとして使って探究を充実させるという意味もあります。前から言われていた、子どもたちが自分で問いを立ててどう課題を解決していくか、情報

を集約してまとめて分析して協議するという流れの形は今も同じです。主体性の話が出てきましたが、そういう学習活動がもっと大切にされるべきだとそれを教科の中にも入れていけないか、新学習指導要領でも言われています。

<酒井委員長>

私の専門の一つが「総合的な学習の時間」です。45分が40分になるとか、総合的な学習の時間を増やすとか、実は時間だけの問題ではなく、要は教員の指導力で大分変わりますし、浅野委員がおっしゃったように、いかに子どもたちが自己学習力を高めてくるかで大きく変わります。

ですからその意味で、先生方の研修もこれからより大切になっていくと思います。この委員会では、「総合的な学習の時間」と「探究的な学び」はイコールなんですけど、地域の方と協働する、地域の教育資源を活かすことがすごく大切ですので、今後このプランで進むのかなと思いますので、ぜひ委員の皆様には「総合的な学習の時間」「探究的な学び」のフォローをしていただきたいなど。それが、柳生委員がおっしゃったように、本当に子どもたちの将来を支えるような学びになり体験になると思います。よろしくお願いします。

中村委員。

<中村委員>

今のお話を聞いて、よろしくお願いしますということなのですが、この放課後が長くなる小学校のことや、中学校でこれから新しい地域クラブが始まることなど、すごく不安が多いのも事実です。

この小学校の間に、この大切な「総合」の中で、放課後をどうやって過ごしていくかということ、子どもたちに放課後の勉強をさせるというのですか、そういうことを先生方をお願いしたいと思います。もちろん家庭でするのが一番大事だと思いますが、やはり学校に行って、友達と話をし、対人関係を作るというのは学校の中で大切なことだなと思います。そういうことができていると、放課後でもお友達関係がうまくいっていると良いのではないかと思いますので、そのあたりはすいませんがよろしくお願いします。

<酒井委員長>

ご意見ありがとうございます。

浅野委員。

<浅野委員>

我々も非常に課題意識は持っています。それをどうクリアしていくのか。今までは知識を教えることが主だったので、教える時間をとるということでしたが、知識をただ得るだけではなくて、それを手に入れるための方法を一緒に練習して、自分でもそれを試していく、その試すというのがこの余白の時間になると理解していますので、その学び方についてしっかり学校でやらなければならないことであることは変わりません。

でも、新たな時代と社会に送り出さなければならない子どもたちのためにやらなければならないことは、時代、時代で変わってきますので、それに対応するように無条件でシフトチェンジする必要がありますが、学校でやらなければならないことはある意味変わっておりませんので、おっしゃるような不安が少しでも払拭できるように注意をしながら進めていかなければならないと考えています。

<酒井委員長>

ありがとうございます。他、いかがでしょうか。

河合委員。

<河合委員>

子どもが大学入学の頃は個人面接だったのが、今はグループ面接に変わってきて、言葉を発せない人は全く発せないで、まわりの人が言っている言葉についていけない、板書ばかりで知識はあってもどこでどういうタイミングで話せばいいのかわからない子が多いと聞きます。自治会でも三世代交流で言葉の使い方を間違っている子どもたちに高齢者が「こう言った方がいいよ」といったことを年2回くらいやっています。そういった違う風を送ってもらえたらいいなと思います。

<浅野委員>

子どもたちもそうですが、一方的に自分のペースで話すことを得意とする子は多いのですが、今おっしゃったように、人に言われた事に対して、それをどういうことを言われているのかを理解して、その人に対して答えを返すという子はとても少ないです。子どもたちにとっては非常に難しく感じていると思います。しかし、これからの時代、その対話の力が絶対に必要になります。この練習こそが対話であり、授業での探究ということになります。ひとつの問題に対し、国語なら国語、社会なら社会、という光の当て方ではなくて、その問題を解くにあたって一番解きやすいもの、光をあてやすいものを探る練習を重ねていくことだと思っています。自分で相手の質問に対して必要な回答を導き出し解決を目指す。今の学習に求められることはそういうことであり、意識して取り組んでいきたいと思っています。

<酒井委員長>

今回、情報提供という形だったんですけど、このお話を元に新しい芦屋の教育のあり方というのが少し見えてきたような気がします。研究の成果等、またいただければと思います。

それでは、これですべての議題を終わります。何か言い残されたというようなことはございませんでしょうか。

新しく参加された方が増えましたけれども、忌憚ないご意見をいただき感謝いたします。次回は寒い冬頃になるのではないかと思います。今回、大変有効な資料を用意していただきまして、そのおかげで良い議論ができたと思いますので、これをまた元に進めていただきまして、また次回の報告及び、今後新たな方針を示していただければと思います。

それではこれで閉会とさせていただきます。皆さんどうもお疲れさまでした。